



性別と人種

最近、女性照明デザイナーの友人と話をしている、ふと気づいたことがあります。「そういえば最近、女性照明家と一緒に働きたいというプロダクションから、よく仕事の話が来るんだよね。」と友人が話していて、「そういえば、私もそう。」と思いました。この1-2年あたりの間に、女性問題を取り上げる内容の公演に関わるのが、とても増えていたのです。今まで、特に気にはしていなかったのですが、数えてみると、今年に入って5公演ありました。今秋に、もう1公演あります。これは偶然とは思えません。だからといって、自分は特に、公共の場で“フェミニスト”をうたっているわけではありませんし、そのような団体に関わっているわけでもありません。無論、女性である自分にとっては、見て見ぬふりはできない問題や、興味深い主題なので、それらのプロダクションに関われることはとても光栄です。それらのプロダクションを経て、今まで詳しく知らなかった、FGMや不妊禁止令、家庭内暴力や人身売買、その他、国際的女性差別や人権について、知ることもできました。

女性差別という言葉は、昔から耳にはしていましたが、新聞やニュースで題材的に取り上げられて来たのは、ここ10年くらいではないでしょうか。英国で、女性の参政権が初めて認められたのは、今からちょうど100年前の1918年(日本は戦後の1945年)。それに伴い、メディアで女性権利を訴える活動家の



最近Southbank Centreにて、照明デザインをした公演Yvette-アフリカの女の子のお話

歴史や、いまだに続く女性差別や人権問題を取り挙げる記事を、近年よく目にします。

日本で学生だった頃、女性の権利や差別を扱うプロダクションに関わることはなかったですし、おおびらにそれらを主張すること自体が、タブーのような雰囲気さえあった気がします。最近、日本で仕事をしている女性の友人から、仕事場でのセクハラや差別の話を何度か聞きました。これは、日本だけではないのですが、聞いていて胸が痛みます。セクハラとはそもそも何なのでしょう。女性に対してだけではなく、もちろん男性の身の上にも起こることです。「男だから」「女だから」そういった考えではなく、人として尊重しあったときに、個人それぞれ得意分野がある、そんな風に考えられるようにはならないのでしょうか。これはもちろんセクハラに限らず、人種差別や多くの尊厳に関わる根本的な問題です。気がつかない間に植え付けられてしまった偏見や差別に、今一度立ち返ることが必要な時代が来ています。

女性問題を題材にした公演に、女性の役者、演出家、クリエイティブズ(美術家、照明、音響家等)を集めようとするのは、不思議ではないかもしれません。英国は、ほかの欧州の国に比べると、女性照明家がとても多いと思います。彼女たちの半数は子もちです。先ほど取り上げた、女性参政権の年代が、その国の女性人権への見直しのスピードに、関係していないとも言いきれません。日本でも産育休制度、児童手当は、改善されていっていると聞きます。これから先、女性も堂々と活躍できる場が、日本にももっと増えてほしいと願います。

差別、人権の問題を突きつける公

演に、照明家として関わることは、責任重大ですし、共感や苦痛さえ覚えることもあります。その感情を、光で表す。照明で、観客をどん底の状況に突き落とす責任もあります。「暗い話の最後に、明るい希望の光を」という照明にできるときは、少し心が救われる気がしますが、希望の光を打てないまま終わってしまう公演は、作っている方も辛いときがあります。でも、その希望を観客に託すという演出家の趣旨も見えなくはないです。

暗く、重い内容の公演だからといって、笑えるシーンがまったくないというわけではありません。ただ、笑えるシーンや、ハッピーエンドが期待できない公演でも、観客は入ります。娯楽、フィクション、ファンタジーというイメージの“エンターテインメント”(ウエストエンドに多い)と、シュール、身体表現、ドキュメンタリー映画のような生々しさをもつ“ライブアート”(アンダーグラウンド劇場に多い)の間に、知的、政治的内容の演劇/公演が、ロンドンではたくさん展開されています。そのような公演を、積極的に観に行く人が、私の周りにはとても多いです。多人種、多文化、そして性別に関係なく働き盛りが集まる都市だからこそ、そこに存在する差別や人権問題に人々が敏感なのは、言うまでもありません。

性別だけではなく、人種(+色)差別を題材に扱う公演に、なぜか日本人の私が抜擢されることがあります。特に黒人差別や黒人社会の内容の公演が、多くなってきたのも確かです。ただ、仕事のバラエティーが増えてきただけかもしれませんが、黄色人の自分は、知らない間に有色人クリエイティブズのカテゴリーに入れられているのかもしれませんが。実際に、一緒に仕事を何度かしたことのある黒人男性演出家が、ツイッターに載せた、“頑張れ、マイノリティー有色人女性アーティスト”のリストの中に、自分の名前が載っていたのを友人から知らされたときには、とても驚きました。今まで仕事場で、性別や人種の違いを、そこまで意識しなくてもよかったということは、ある意味、人や環境にとっても恵まれてきた証拠なのかもしれません。